

# コルカタのハルモニウム産業にみる都市性

岡田 恵美

1991年の経済自由化政策以降、急激な経済成長を遂げるインド。

新興富裕層や中間層の台頭に伴う内需拡大や、人口12億という巨大市場をターゲットとした外資系企業の参入、また膨大なNRIの輩出等、こうした急速な社会・経済的変動は、インドの楽器産業にも少なからず影響を及ぼしている。

インドのハルモニウム産業は、近年のNRIの増加に伴い、国外輸出の増加が顕著な成長産業である。だが一方で、インド東部コルカタ<sup>2</sup>のハルモニウム産業は、国産製作の先駆けとして高度な技術力を維持してきたにも拘らず、近年は、大量生産される他都市の製品に圧倒されて停滞傾向にある。90年代以降の社会的変動の中で、各都市の楽器産業は、加速化する変化にいかにか戦略的に対応してゆくかという問題に直面し、変化への適応性の有無が、都市間における産業規模の格差を助長している。こうした時代の潮流から逸脱してしまったのが、コルカタのハルモニウム産業である。

そこで本稿は、コルカタにおけるその産業に焦点化し、楽器という物質的側面と産業体制といった社会的側面から、その都市性を抽出しようという試みである。前半部では、西洋由来の鍵盤楽器であるハルモニウムがいかにかコルカタの都市文化の中で受容され、ハルモニウム産業が支えられてきたかという点に注目し、後半部では、コルカタ製ハルモニウムの楽器構造や機能、また製作に従事する楽器工房や職人を含み、コルカタの産業の特質を検証する。



図1. コルカタ製ハルモニウム

## 1. コルカタにおけるハルモニウム受容史

### 1.1. 19世紀後半のハルモニウム・リードオルガン産業のグローバル化

ハルモニウムは、手鍵盤とストップを備え、鞆からの気流によって金属製リードが振動して発音する自由簧の気鳴楽器である。アレクサンドル・F・ドゥバンAlexandre-François Debain (1809-1877) が、1842年にフランスにおいて自身の考案楽器をハルモニウムという名

称で特許および商標登録して以降、その製作技術は欧米諸国に波及した。フランス国内では圧縮型の鞆をもつハルモニウムの産業が伸展したが、他の欧米各国では、その兄弟楽器といわれる吸入型の鞆をもつリードオルガンが大規模な産業として興隆した。こうした19世紀後半の世界的なハルモニウムのグローバル化は、アジア諸国にも影響を与え、日本では明治中期に始まった足踏みリードオルガンの製作を機に洋楽器製造が幕を開け、同時期のインドでは、ハルモニウムを改良し、その国産製作が芽吹いた。

### 1.2. コルカタでの国産製作

1886年、英国統治下のコルカタで、ドゥワルキン工房Dwarkan & Sonsの初代ドゥワルカナト・ゴージュDwarkanat Ghosh (1847-1928) は、輸入品を改良した初の国産ハルモニウムを発表した。この事実は、後に英国の新聞記事でも紹介され、安価で製造可能な小型の手漕ぎハルモニウムが、インドにおける音楽の大衆化やハルモニウム取引の活性化の起爆剤になったと記されている<sup>3</sup>。

当時のコルカタは、英国のインド支配の根拠地として総督府が1912年まで置かれ、芸術や学問の都として東西文化の融合が図られ、1913年にアジア人初のノーベル文学賞を受賞したロビンドロナト・タクルRabindranath Tagore (1861-1941) を筆頭に、国際的にも著名な文化人を輩出してきた。ドゥワルカナトは、ピアノの調律・修理師として英商社のハロルド社Harold & Co.のコルカタ支社に勤務し、西洋楽器の構造や機能、製作技術に接する恵まれた環境にあった。そして1865年の独立起業後は、西洋楽器の輸入販売や楽器修理に従事し、約20年の歳月を経て、ハルモニウムの鞆を内蔵型から外付型の手漕ぎ式に改良し、床に置いて胡座の体勢で演奏可能な「ドゥワルキン・フルートDwarkan flute」を発表した。その国産ハルモニウム第一号では、リード盤や鍵盤の小型化および構造の単純化が図られたため、低価格での製造が可能となり、維持や修理も容易であったという。インドに伝播した当初は、インド人富裕層や在留欧州人、キリスト教宣教師という一部の使用に限定されていた舶来品のハルモニウムが、こうしてインドの文化に適合した形態や機能に改良されていったのである。

### 1.3. コルカタのハルモニウム産業を支えた文化人

ドゥワルキン・フルートの発表以降も、ドゥワルカナトは試行錯誤を重ねると同時に、普及促進にも意欲的に取り組み、当時のコルカタの知識人や音楽家に宛てて楽器を寄贈している。音楽学者S.M.タクル Rajah Sourindro Mohun Tagore<sup>4</sup> (1840-1914) や息子のプロモド・K・タクルPranod Kumar Tagore<sup>5</sup>、児童書作家ウペンドロキシヨル・ラエチョウドゥリUpendra Kishore Roychowdhury (1863-1915)、前述のロビンドロナトや兄で劇作家のヨティリンドロナト・タクルJyotirindranath Tagore (1849-1925) 等が、ドゥワルカナトの元に返信の書簡を寄せている。その内容は、音色が歌の伴奏に適し、小型であるにも拘らず、

気鳴楽器特有の力強い音量を賞賛している点に集約される。以後のドゥワルキン工房は、国産ハルモニウムの製造に伴って成長を続け、音楽書の出版<sup>6</sup>や蓄音機やレコードの販売にまで事業を拡大し<sup>7</sup>、1893年には約100名もの従業員を抱えるようになった。このようにコルカタで興隆したハルモニウム産業は、地元の文化人や知識階層と深い繋がりを築いていた。

当時の有力英字新聞であるベンガリー紙The Bengalee には、1890年にインド国民会議派の大会がコルカタで実施された際、兄のヨティンドロナトがハルモニウムを伴奏し、ロビンドロナトが歌唱したという記事が掲載された。また1901年設立の教育機関シャントニケットン<sup>8</sup>Shantiniketanでは、ロビンドロナト自身の作詞作曲による「ロビンドロ・シヨングト Rabindra Sangeet」の指導にハルモニウムが採用されていた。英国人司祭でインド独立運動にも貢献したC・F・アンドリュースCharles Freer Andrews (1871-1940) はそれを目撃し、欧州由来のハルモニウムではなく、インドの伝統楽器を伴った方が良いのではないかと進言したが、当時ロビンドロナトはそこでのハルモニウムの使用を止めることはなかったという<sup>9</sup>。こうしてコルカタで支持を得た国産ハルモニウムは、20世紀初頭に入ると国内広域へと波及し、古典音楽や宗教歌謡の伴奏楽器として採用されていった。

#### 1.4. 20世紀初頭のインド音楽界の転換期とハルモニウム

20世紀初頭はインドのルネサンス期<sup>10</sup>と称され、音楽界においても重要な転換期であった。19世紀のムガル帝国の衰退に伴い、各地の藩王が強大な富や権力を保持すると、彼等はパトロンとして音楽家の保護や、音楽研究の支援を行うようになる。その結果、19世紀後半から国家および国民を意識させるナショナル・アイデンティティの気運が植民地下で高まり、そうした社会背景を反映して音楽をめぐる環境にも様々な変化が及んだ。西洋人の音楽研究者の他にも、V・D・パルスカルVishnu Digambar Paluskar (1872-1931) やV・N・バートカンデーVishnu Narayan Bhatkhande (1860-1936) といった国内の音楽学者が頭角を現し、音楽理論の体系化や音楽教育の改革、そして音楽会議の実施が活発化し始めた。こうした音楽的環境の変化はハルモニウムの浸透にも少なからず関与している。例えば、音楽教育機関の設立は音楽学習者を拡大させ、音楽の教授の現場では弦楽器のサーランギーやエスラージの代替として、ハルモニウムが伴奏楽器として定着していったのである。

#### 1.5. 1939年 国営ラジオ放送によるハルモニウム使用禁止令

国産ハルモニウムが広く浸透する一方で、ハルモニウムに対する非難や論争も勃発するようになった。その矛先はそれが欧州由来の「外来楽器」であることよりも、平均律に調律された「鍵盤楽器」であるが故に、インド古典音楽の要である微分音や、ポルタメントのように滑らかな音の移行を伴う装飾技法が表現できない点に向けられていた。

南インドでは、1927年にチェンナイで開催された全インド音楽会議All India Music Con-

ferenceにおいて、ハルモニウムの採用禁止に関する明確な方針が示され、これに遅れて、北インドでも1939年に国営ラジオ放送All India Radio（以下、AIR）が同放送でのハルモニウムの使用を全面的に禁止した。

AIRのこの決断に深く関与した人物こそが、先のロビンドロナトである。彼は1938年初旬に当時AIRコルカタ支局のディレクターであったオショク・シェンAshok Sen にハルモニウムの使用禁止を進言し、それが総ディレクターのライオネル・フィールデンLionel Fieldenに伝わった<sup>11</sup>。フィールデンは英BBC放送からAIRに派遣された英国人で、同時期にAIRのディレクターであった英作曲家のジョン・フォールズ John Foulds<sup>12</sup>（1880-1939）による記事、それは微分音をもつインドの音楽にはハルモニウムは適さないという内容であったが、その考えに感化され、翌1939年の局内会議Station Directors Conferenceにおいて同放送局におけるハルモニウムの禁止を決定したのである<sup>13</sup>。

こうした経緯が、今日ロビンドロナトがハルモニウムの採用に反対した主要人物として周知される所以と考えられる。だが、前述のドゥワルキン・フルートに対するロビンドロナトの好意的な書簡(1888年)や、タクル兄弟がハルモニウムを使用していた事実を語る記事(1890年)が現存する以上、なぜロビンドロナトがハルモニウムの使用に対して反対の立場に転じ、なぜ晩年（1941年没）の1938年に行動を起こしたのかは謎である。推察される理由には、第一に「鍵盤楽器」としてのハルモニウムの欠点が挙げられ、第二には英国からの独立運動の高揚や民族文化尊重の動きに伴って、欧州由来の「外来楽器」である点も障害になったと考えられる。また更に第三には、急速なハルモニウムの浸透は、それ以前の伴奏楽器やその奏者の死活問題にも繋がり、そうした懸念が引き起こした行動とも推察される。コルカタでは、ロビンドロ・シヨンギトを継承するビッシュバロティ音楽協会 Vishva-Bharati Sangeet Samitiにおいても、1988年までハルモニウムの使用が禁止され、伝統楽器のサーランギーやエスラージが伴奏に用いられた。

### 1.6. コルカタにおけるハルモニウム奏者の活躍

AIRや一部の音楽機関の規制とは裏腹に、音楽学校の教授ではハルモニウムの浸透が加速化し、古典声楽家の多くは伴奏楽器としてハルモニウム奏者の採用を続け、更にはロビンドロ・シヨンギトにおいても草の根ではハルモニウムは不可欠な伴奏楽器として定着していった。こうした楽器の需要拡大と平行して、コルカタではハルモニウムを古典音楽の独奏楽器として用い、その新たな可能性を追究する音楽家も現れてくる。

その代表的な人物としては、卓越した演奏技術をもつモントゥ・バネルジーMontu Banerjee (1915-1980) や、1940年代からコルカタの音楽界で活躍したギャン・プロカシュ・ゴーシュJnan/Gyan Prakash Ghosh (1912-1997) の名が挙がる。

ギャンバブーの愛称でコルカタの人々から愛されたギャン・プロカシュは、ドゥワルキン

工房初代ドゥワルカナトの孫であり、映画音楽監督や打楽器タブラーの奏者として多方面に活躍すると同時に、15年間にわたってAIRの仕事に従事した。彼は、ハルモニウムの利点について次のように指摘する。第一に歌唱者が伴奏をしながら同時に歌うことが可能なこと、第二に歌唱者の声域や声質によって、ハルモニウム側でもストップを選択しながら音域や音量の調整が可能であること、第三に優れた伴奏者は歌唱者にとって大きな支えとなり、そして最後に、その素早い発音や減衰しない音が複雑な古典音楽のリズムや速さにも対応可能であることに言及している<sup>14</sup>。したがって伴奏楽器としてのみならず、独奏楽器としても十分に魅力的な楽器であったに違いない。

1997年の彼の死亡記事は新聞各社に掲載され、彼がいかにコルカタの文化界や古典音楽界で重鎮であったか、また演奏家としての功績や後進の育成といった教育面での貢献が、いかに評価されているかが理解できる。生前の1984年には国家勲章のパドマ・ブーシャンPadma Bhushanが授与された。

### 1.7. 1971年のハルモニウム討論会と規制緩和への動き

ラジオ放送上のハルモニウムの不遇の時代は、1939年から30年以上も続いたが、1971年に入ると新たな動向が見られ、それがAIR主催のハルモニウム討論会である。そこでは、番組上のハルモニウムの使用禁止に対する再検討が議題として掲げられ、ギャンバブーといった音楽家や音楽学者を筆頭に、多方面の音楽関係者がインド各地から集結し、使用推進派と否定派が討論を交わした。その後、AIRは遂にハルモニウムの放送禁止を部分的に撤回する決断を示し、規制緩和の方向へと動いた<sup>15</sup>。

西洋由来の楽器であり、鍵盤楽器という二重苦を背負ったハルモニウム。しかしながら、コルカタにおけるその受容史を概観すると、逆境の中にもそこには創造性を発揮する職人や演奏家の存在があり、地元の音楽家や文化人がコルカタのハルモニウム産業を支えてきた。一方でハルモニウム論争を代表する数々の事象では、西洋人の関与も無視することはできない。即ち、コルカタという英国植民地の辺境の地で芽吹き、東西文化の混沌とナショナリズムの気運が高揚する時勢の中で、ハルモニウムはまさにそうした時代の潮流に巻き込まれた楽器と言っても過言ではないだろう。

## 2. コルカタのハルモニウム産業

### 2.1. ハルモニウム産業の拡大に伴う都市単位での地域化

コルカタでハルモニウム産業が興隆し、ハルモニウムが広域に浸透し始めると、その産業は他都市にも波及した。インド最大の商業都市ムンバイでは、1935年に楽器修理業からハルモニウム製作に進出した工房が創業を開始し、以後少し遅れてデリーでは、インド独立(1947

年) 前後から本格的な生産が始まって産業が盛行した。その他ではパンジャブ州のルディヤーナーLudhianaやチャンドイーガルChandigarhにも幾らか製作工房が見られるが、その産業の主要都市は、コルカタ、ムンバイ、デリーの3都市である。

ムンバイを含むマハーラーシュトラ地域では、国産製作の開始以前にも、コルカタ同様に輸入の足踏みハルモニウムが受容され、主に19世紀後半から20世紀初頭にかけて同地域で流行したマラーティー語の舞台歌劇で使用されていた。1882年11月、舞台演出家キルロスカル Balwant Pandurang Kirloskar (1843-1885) による歌劇「サンギート・シャクンタラー Sangeet Shakuntala」(初演1875年)の公演において、ハルモニウムは最初に舞台上で使用されたと伝えられている<sup>16</sup>。ムンバイ随一の老舗ハルモニウム工房であるハリパウー工房 Haribhau Vishwanath Co.の現経営者ウ



図2. ハルモニウム産業関連都市

ダイ・ディワン Uday Diwaneによれば、こうした歌劇でのハルモニウムの採用が、以後1930年代から興隆するムンバイでの楽器製作にも影響を与えているという。

今日のムンバイ製ハルモニウムの構造をコルカタ製と比較すると、まず音色や機能に顕著な違いがある。コルカタ製の場合は、古典声楽と同時にロピンドロ・ションギトの伴奏楽器としての需要が大きいため、使用されるリードやその配置方法は、大音量で音の立ち上がりに優れた古典声楽用と、少量の気流でも緩やかに発音するロピンドロ・ションギト用の両方が一台に装備される。他方、ムンバイ製ハルモニウムは、音量と発音の鋭さを重視した前者の構造のみであり、鍵盤の構造も簡略化されている。

このように楽器構造の特性は、ハルモニウムが使用される音楽様式や使用の場と密接に関わると同時に、各都市の工房における生産体制とも深い関連がある。例えば、コルカタの工房の場合は、製作過程の多くの部分を請負制の小規模な部品工房に外注することで成立しているのに対し、ムンバイの工房では、同一工房内に各作業工程の専任職人を抱え、工房内で全工程が自立する組織形態である。したがって、製作時間の短縮や生産コストを考慮するならば、ムンバイの生産体制がより効率的で便益が見込めるのは明らかである。

またムンバイよりも更に独立生産体制を確立しているのが、デリーのハルモニウム産業である。デリー市内では大規模な工場の設置が条例で禁止されているため、近郊のウツタル・

プラデーシュ州のノイダNoidaや、パンジャーブ州のチャンディーガル等に工場を所有し、量産可能な体制が構築されている。

テリーでハルモニウム製作を営む工房の創始者は、1947年のインド・パキスタン分離独立にともなう、現パキスタンからの亡命者が多く、その殆どがラホールやパンジャーブ地方からテリーに移住したシク教徒である。彼らは旧市街に位置するダリヤーガンジDaryaganjやナイサラクNai Sarak地区、新市街のラージパト・ナガルLajpat Nagar地区に、工場とは別に創業当時の中小の販売店を構える。中でもダリヤーガンジ地区はテリー最大の楽器街と化し、ハルモニウム製作を主とするピーナー工房Bina Musical Store/Bina Enterprises（1941年創業）や、LMH工房Lahore Music House（独立以前1940年代にラホールで創業）、DMS工房Delhi Music Store（1970年創業）等が軒を連ねる。

テリーのハルモニウム産業の特徴は、前述のように、完全な独立生産体制による、低価格で大量生産可能な環境の配備が挙げられ、流通面では国外輸出量の占有率が非常に高いことが指摘できる。近年は、メディアを駆使したインターネット販売や欧米での販売店の設置等、NRIに向けた流通販路を拡大しているのもその特徴である。

インドのハルモニウム産業は、生産者である楽器工房が直接、流通・販売を手掛けるため、楽器工房の経営者にも今後は更に存続をかけた経営能力が求められ、こうした流通・販売面での変化が、変化の時流に乗れないコルカタの一部の楽器工房の存在を揺るがしているのは事実である。

## 2.2. コルカタ製ハルモニウムの特徴

都市単位での産業格差が著しい中でも、「コルカタ製＝高品質」という認識は、テリーやムンバイの工房でも顕在である。具体的な理由には、鍵を動かすレバーやリード盤の複雑な構造、また移調鍵盤の装備等が指摘され、そうしたコルカタ製の移調鍵盤機能付ハルモニウムを、他都市の工房が取り寄せて販売することは珍しくない。本節では、コルカタ製ハルモニウムの構造や機能を、外箱と鞆(送風機構)、ストップ盤、リード盤、鍵盤の順に検証しながら、他都市の製品との相違点やコルカタ独自の特徴を考察する。



図3. コルカタ製 携帯型ハルモニウム（左図は収納時、中央・右図は演奏時）

### 2.2.1. 外箱と鞆（送風機構）

コルカタ製ハルモニウムは、携帯型、非携帯型、小設計型に大別される。他都市では殆ど生産されていない携帯型は、収納時（図3左）は取手と鍵が付いた箱状であるが、演奏時（図3中央）には上半分の箱を外し、本体左右のクリップを指で上部に押し、楽器本体を引上げることによって高さが約1.5倍になり、背後に付帯した鞆の開閉が可能となる。

本体の外箱には、乾燥させたチーク材が使用される。かつての対外貿易において、チーク材はインドから大量に輸出され、耐久性やその高い密度や硬度からも優れた楽器素材として重宝されたが、近年はインド国内での価格が高騰している。デリーの工房では安価なパイン材が主流となったが、コルカタの工房では、マディヤ・プラデーシュ州やミャンマー産のチーク材を確保し、材質に拘泥した製作が続けられている。

上蓋部分の装飾細工（図3右）は各工房のロゴマークの意味をもち、「フレットカッター」と呼ばれる専門の部品工房が請負う。ホウバザールBowbazar地区にあるそうした部品工房では、リード盤製作及び上蓋装飾を手掛け、コルカタ市内の多数のハルモニウム工房のロゴ・パターンを所有している。また鞆についても、鞆製作の専門部品工房で製作される。鞆は片手で操作可能なように本体背面に付属され、上部開閉型鞆と左右開閉型鞆の2種類に大別される。鞆は厚紙を折って圧縮したもので、その接続部分には羊革が貼られる。

送風機能に関しては、図4で示すように、鞆を閉じると鞆内部の空気が圧縮されて一気に本体に流れ込み、空気袋には圧縮された空気が充満する。ストップを引出した場合、ストップ盤の穴を留めていた栓が連動し、空気が空気袋からストップ盤の穴を通してリード盤へと流れ込む。こうした送風の仕組みからも明らかのように、ハルモニウムはリードオルガンとは異なり、直接圧力がかかるために外箱の硬度やリード盤及びストップ盤の密閉度が不可欠なのである。即ち、そこに職人の精巧な技術が要求される。

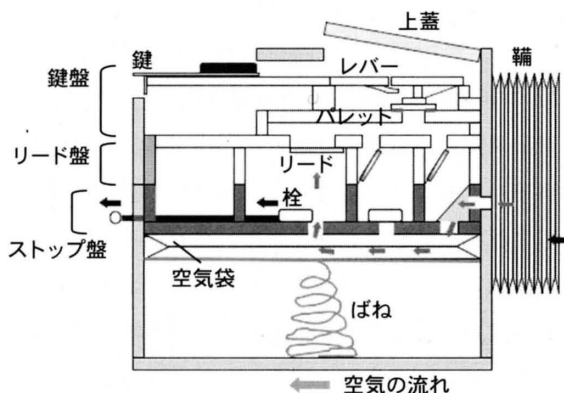


図4. 断面図からみる送風の仕組み

### 2.2.2. ストップ盤

ハルモニウムのストップは、音色ストップとドローン・ストップに大別される。

まず音色ストップについては、「女声female (voice)」、「男声male」、「低音bass」の3種があり、音域と人の声域とを対照させる独特の呼称は、ハルモニウムがいかにかの歌唱の伴奏楽器



としてインドで発展してきたかを象徴している。

リードの列数が、「ダブル・リード（2列）」か「トリプル・リード（3列）」によってストップの仕様は異なり、コルカタ製トリプル・リードの場合、A：女声ストップ、B：開放的な音色の男声ストップ（女声より1オクターヴ低音域）、C：閉塞的な音色の男声ストップという構成である。男声より1オクターヴ低音域の低音ストップは、ムンバイ製では重宝されるが、コルカタ製ではあまり好まれず省略される場合が多い。

図5のストップ盤と各種ストップを対照させると、ストップ盤が小部屋に仕切られ、ストップのノブから延びた金属棒が各小部屋まで繋がっていることがわかる。また前述の3種のストップに加え、震音効果を生じさせるトレモロも標準装備される。その構造は、ストップ盤の空気穴の上に、羊革を貼った木片を一方のみ固定して片側は自由にさせておき、実際に穴を通して空気が流れ込んだ際には、木片が揺られて気流を操作し、それによってトレモロ効果が得られる仕組みである。

次に、D：ドローン・ストップであるが、これはインド製独自の機能であり、古典音楽では演奏するラーガ（旋法）に合わせてドローンの音も使い分けられるため、通常4～6本程度が装備される。音色ストップのリードがリード盤に設置されるのに対し、ドローン用リードはストップ盤に直接固定される。

素材に関しては、ストップ盤の栓といったアクション部分にはブナ材やパイン材が使用され、ストップ・ノブは工房によっては金銀といった色や、大小の大ききで区分し、機能的性が考慮されている。

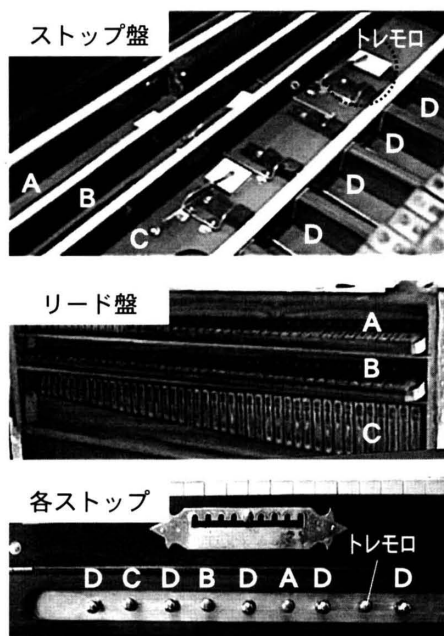


図5. ストップの種類  
(A女声、B男声開放音、C男声閉塞音、Dドローン)

### 2.2.3. リード盤

リード本体に関しては次節で後述し、ここでは最初にリードの配置方法に注目する。

都市単位での地域化はその配置にも明らかに見られ、ムンバイ製ではリード盤に対して「垂直と垂直」、デリー製では「平行と平行」、そしてコルカタ製ではリードの列数に関わらず、その配置は「平行と垂直」の組み合わせになる。図5のリード盤を見ても、A：女声は垂直（高音部のみ平行）、B：男声開放音は垂直、C：男声閉塞音は平行、という具合である。垂直とは言え、完全な90度ではなく、各リードの上部には鍵盤への空気穴があり、それらが隠

れる程度の傾斜がある。では、一体なぜこうした配置に設計されるのだろうか。

その理由を解く鍵は音色の相違にある。垂直に設置された場合は、図6のように、リードの舌はストップ盤に非常に近い位置になり、圧縮された気流が平行時よりも速くリードに到達する。また更に、各ストップの小部屋を狭く保つことができ、より高い気圧をリードに加えることが可能となる。したがって、そうした構造からアタック音が速く、音量のある鮮明な音色が生まれ、特に古典音楽やハルモニウムの独奏にはそうした音色が要求されてきた。他方、ロビンドロ・ションギトや軽古典音楽の伴奏には、歌唱者を引立てる柔らかな音が求められ、平行な設置はそうした音楽様式に即した構造である。即ち、コルカタ製は、そうした両者の要求を満たす構造を完備していると言える。

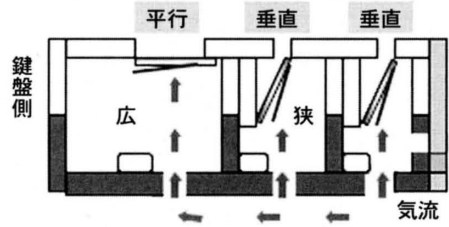


図6. リード配置の断面図

リード盤の穴開け作業は、前述のフレットカッターと呼ばれる部品工房が請負う。各リードを設置するための空気穴は正確な寸法で計られ、電動糸鋸を使用した一枚一枚の緻密な裁断作業には熟練した技術が必要である。

#### 2.2.4. 鍵盤

コルカタ製が高品質として名を馳せる理由は、何よりもその複雑で精密な鍵盤構造にあり、最初に移調鍵盤について考察する。それはリード盤や鍵盤のレバー部分を固定したまま、鍵盤の部分のみを左右に移動させることによって移調可能となる仕掛けである。



図7. 移調鍵盤 (左) と木製カプラー (右)

移調鍵盤機能によって、Cを起音に上下に半音で各4音の移動が可能であり、図7左図で示す鍵盤下部のつまみで調節する。即ち、3オクターヴ鍵盤(37鍵)の場合、レバーの部分は追加の8音を見込んで45本で構成され、本体の横幅はその分だけ長くなる。

次にカプラー機能に注目すれば、これは仏製ハルモニウムやリードオルガン同様に、押さえた鍵の一オクターヴ上の鍵、或いは下の鍵、または両方が連動して発音する機能であり、各鍵の下にそのオクターヴの上/下の鍵を繋ぐ装置が斜めに配置されている。コルカタ製では、図7左図に見られる右端のストップを押すと、押さえた鍵の1オクターヴ下の音が連動

して発音する。カプラー機能はデリー製にも見られるが、その装置は金属製であり、チーク材で製作されるコルカタ製のカプラーもまたその一特徴として指摘できる。

最後に、鍵が動く仕組みについて考察する。現在、デリー製やムンバイ製では、金属製のスプリングを直接鍵に当てて動かす方法が一般的である。デリー製に特徴的な完全一体型である簡易な鍵盤構造を「ソリッド・キー型solid key-model」（以下、ソリッド型）、またムンバイ製に代表的なパレットとスプリングを用いた鍵盤構造を「パレット型pallet-model」と呼ぶ。これらに対し、コルカタ製の主流は木製レバーと鍵を噛ませた「鍵&レバー型stick & lever-model」（以下、レバー型）鍵盤である。

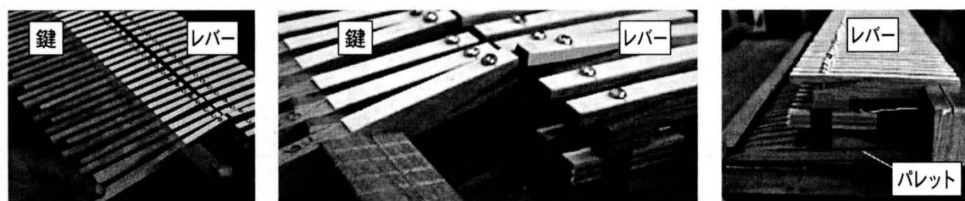


図8. レバー型鍵盤の仕組み（左・中央は鍵とレバー、右はレバーの断面）

レバー型鍵盤は、図8中央の鍵とレバーの双方の切り込みが噛み合う仕掛けであり、鍵を下に押すとレバーが引上げられ、同時に空気穴を封じていたパレットが浮き上がって発音する。逆に鍵を離すと、レバー下部に付いたスプリングによって鍵は元に戻る。

こうしたレバー型鍵盤は移調鍵盤機能を可能にさせ、固定されたレバーを移動可能な鍵の数だけ用意すれば、その分の音域が広がる。一方、鍵にスプリングを直接噛ませたソリッド型やパレット型では、鍵の移動は物理的に不可能である。即ち、移調鍵盤機能付ハルモニウムがコルカタ以外では製作されない理由には、こうした鍵盤構造による事情がある。

楽器の価格設定も、こうした鍵盤構造や付属機能によって異なり、2010年時点では、移調鍵盤機能付のレバー型鍵盤ハルモニウムはRs.16,000-22,000(約32,000-44,000円、Rs.= 2円換算)程で、デリー製のソリッド型鍵盤ハルモニウム(Rs.4,000前後)と比較すると非常に高価である。だが、歌唱者の声域や演奏するラーガに合わせて一瞬で移調可能という、その利便性がコルカタのみならず他都市でも評価され、また、それを供給出来るのはコルカタの職人しかいないのである。

### 2.3. パリタナ製リードへの依存

コルカタでは、前述のように1886年から国産製作が進行したが、ハルモニウムの心臓部であるリードに関しては、当初はフランスやドイツからの輸入品であった。独ハルモラ社Har-molaの1930年代の製品目録には、インド向けに特化した真鍮(黄銅)製リードが記載され、国産ハルモニウムとは言いながらも、産業の黎明期においては、国内外の部分調整によるグ

舌の取付)、ヴォイスィング及び調律作業(舌の両端部分を削りながらの、発音の調整および調律)の5つの作業工程が、約30名の職人によって手作業で進められている。同工房での月間生産量は平均150セットといい、過去10年の生産量に変動はない。

コルカタの工房に出荷されたパリタナ製リードは、再度、ヴォイスィング作業を専門とする職人に外注に出され、正確に発音するように舌部分が整えられる。その後、リードを取付け、完成品の最終的な調律は、Aの音叉(A=440Hz)を用いて工房専属の職人が行う。コルカタでは、ロビンドロ・ションギトを中心に西洋のコードを使用する音楽様式にもハルモニウムが使われ、また移調鍵盤機能を付属していることから、12平均律で調律される。

このように国産リード製造も単一に規格化されるのではなく、各都市の工房から要求される音色・音域に応じて種別化され、都市性が反映されている。また重要な点は、パリタナ製リードとコルカタ製ハルモニウムが一心同体の関係にあり、言い換えれば、パリタナでの生産量に限度がある以上、コルカタ製ハルモニウムの生産台数にも常に上限がある。

#### 2.4. コルカタのハルモニウム産業の特質

コルカタには、前述のドゥワルキン工房の他にも、ハルモニウムを主楽器とする小規模な工房が多数存在する。ラルバジャルLalbazar地区には、R.B.ダス工房R.B.Das(1890年創業)や、マノジュ・クマール工房Manoj Kumar sardar Bros. (旧ショロット・ショルダル工房Sarat Sarder & Sons、1919年創業)があり、ラシュビハリRash Behari Avenue地区には、パクラシ工房Pakrashi & Co. (1930年創業)やメロディー工房Melody (1935年創業)等が店を構える。また、ポール工房Paul & Co. のように、優れた職人が独立して新たに製作工房を設立する例もある。

これらの工房を包含した、コルカタの産業の体制を以下に整理すれば、第一の特徴に、楽器工房とその下請の部品工房の連携によって産業が成立している点が指摘される。ムンバイやデリーの工房内でも各工程の分業化は行われているが、コルカタのように請負制の部品工房が多数存在する例は異例である。前述したように、鞆製作、リード盤&上蓋製作、ヴォイスィング作業、その他にもストップの成形作業は専門工房で行われる。ドゥワルキン工房の4代目プロタプ・ゴージュPratap Ghoshによれば、1987年の彼と叔父のキャンババーとの調査では、各楽器工房に従事する職人は約1000人、更に下請の職人は約350人であったという。コルカタ市内に隣接するハウラー市Howrahのウルーベリア地区Uluberiaやアームタ地区Amta、またフグリー市Hooglyのダンクニー地区Dankuniに林立する下請の工房の多くは5人以下で構成され、組合制度もなく、工房設置の登録すら行われていない。またそこでの職人は大工のカーストや、革を扱うため、下層のベンガル・イスラム教徒が比較的多いのも特徴である。職人の賃金は出来高制であるが、技術を習得すれば、他の手工業より賃金は割高で、製作技術は外部に口外しないよう秘密にされた。それは知識や技術をもった職人の増加

を抑制するためであり、イスラム居住区での閉鎖的な生産体制が、職人の高度な技術力の継承に一役買ってきたと考えられる。

だが一方で、生産性の観点から見れば、そうした分業体制を貫くことは、1台の製作コストも高くなり、大量生産が可能な環境とは言えない。事実、ドゥワルキン工房では月々20台前後を製作・販売するが、これは機械化されたデリーの大手工場の月間700台という生産量とはかけ離れ、国内での市場占有率から見ても非常に僅かな数字である。

そして第二の特徴には、リード製造をバリタナに依存している点にある。デリーの工房ようにリード製造を含む完全生産体制にある場合は、各工房単位で生産量の管理が可能であるが、コルカタの場合は、リードの生産量に産業自体が左右されることは、先に言及してきた通りである。

### 3. おわりに

近年のコルカタでは、今後の存続や生産販売台数の縮小傾向を不安に思う工房も少なくない。男子の後継者不足や、国外への販路開拓の遅れ、また90年代以降の「カシオ」ブームというべきミニキーボードや電子キーボードの大量流入等、個々の工房が様々な不安要素を抱えながら、品質への拘泥と誇りを頼りに、模索が続けられている。しかしながら、コルカタのハルモニウム産業全体が一種の「共同体」として成立している以上、例え一工房が販路拡大を目指して経営改革を掲げたとしても、実際には生産量を格段に上げる体制にはない。そこが近年のハルモニウム産業を牽引するデリーの大手工房との明確な違いであり、欧米各国にNRIのネットワークを持ち、商売に長けたシク教徒の経営者達には太刀打ち不可能なのである。

コルカタの鍵盤楽器文化の中でも極めて重要な役割を果たしたドゥワルキン工房でさえも、今後の存続に危機感を抱いている。電子鍵盤楽器が急激に需要拡大し、2007年には日系企業のヤマハやカシオがインド市場向けの電子キーボードを発表する程に至り、こうした状況に対して、工房4代目経営者のプロタブは、「電子キーボードは誰もが簡単に演奏が可能なインスタントな楽器」として嫌悪を露にし、音楽には、音楽に献身する姿勢や「リヤーズ riyaz」(練習、修行の意)が何よりも重要だと強調する。だが皮肉なことに、歴史的に見れば、インドにおけるハルモニウムの浸透は、鍵盤というインターフェースによる高い視覚的要素を武器に、従来の伴奏楽器であったフレットレスな擦弦楽器よりも習得が容易であったことがその普及の一因であった。裏返せば、鍵盤楽器であるハルモニウムは、当時は「インスタント」な楽器であった、と言えなくもない。かつて、新旧の楽器をめぐる対立や採用をめぐる論争が起こったように、まるで約100年の周期で「伝統」の座が塗り替えられて変容していく。ドゥワルキン工房に併設された販売所の店頭にも、新品のヤマハ製電子キーボードが置

かれるようになり、時代の流れは時に残酷である。

コルカタのハーモニウム産業が、存続と伝統の維持を模索する中で、明るい兆しもある。それは若手ハーモニウム奏者の活躍である。かつての名ハーモニウム奏者モントゥ・バネルジーの曾孫であるスヴェンドゥ・バネルジーSuvendu Banerjee (1986-) は、コルカタを中心に音楽祭で活躍中のハーモニウム独奏奏者である。彼は、古典音楽のラーガを演奏するためには、コルカタ製の移調鍵盤機能は必須であり、各ラーガによって起音を調整することで、高速の奏法や微細な装飾音が可能になると言う。演奏者あつての楽器産業であり、こうした新たな動向が今後の産業にどのように影響を及ぼしていくかが注目される。

本稿は、2010年8月に現地調査で得た情報を基盤とし、三島海雲記念財団・学術研究助成の研究成果の一部である。

## 注

- 1 Non-Resident Indianの略で、インド国籍をもつ在外居住者を意味し、インド系移民(PIO=Persons of Indian Origin)とは区別される。90年代以降、NRIによる国内送金は、インドの実質国内総生産(GDP)にも多大な影響力を及ぼし、また経済面のみならず、NRIの増加に伴うヒトの環流は、映画や音楽といった文化面にも変化を与え続ける。
- 2 近年、インドの地名は、英統治時代の名称から各地域の公用語に即した地名へと変更される傾向にあり、本稿では併用による混乱を回避するため、コルカタ(旧カルカッタ)、ムンバイ(旧ボンベイ)というように、新名称に統一する。また、人名のカタカナ表記に関しては、ベンガル人の場合はベンガル語の発音を、その他はヒンディー語の発音に依拠する。そして人名や地名のアルファベット表記の付記に関しては、既に英語表記が定着している場合はそのまま流用し、翻字は用いない。
- 3 Ghosh, Pratap. 'A study on Harmonium: The Most Popular Musical Instrument in India & its Traditional Makers in Calcutta', Bhavan's College of Communications & Management, 1987, pp.3. ドゥワルキン工房4代目プロタプ・ゴーシュによる未出版の学位論文。
- 4 S.M.タクルは、1874年出版のベンガル語による教則本『ハーモニウム・スートラ*Harmonium-Sutra*』の中で、インドに伝播した仏製ハーモニウムの様相や、演奏方法、またハーモニウム演奏用のインド音楽の譜曲等を記している。その記述から、当時は61鍵の足踏みハーモニウムが流通し、両手でのインド音楽演奏が試行され、また独自の記譜法には鍵盤上の指使いが付記される等、S.Mタクルによる多くの創意工夫が読み取れる。Tagore, S.M. *Harmonium-Sutra: a treatise on harmonium*. Calcutta: Pracrita Press, 1874.
- 5 西洋音楽にも造詣が深かった作曲家。四綱楽器分類法を発案したV・マイヨンの父親で楽器商のC.マイヨンCharles Borromée Mahillon (1813-1887) の会社から、1883年に音楽書も出版し

- ている。‘*First thoughts on Indian Music, or Twenty Indian Melodies composed for the Pianoforte*’, C.Mahillon & Co. 1883.
- 6 当時、ロビンドロ・ションギトの譜曲集の著作権はドゥワルキン工房が所有し、同工房出版の1941年の譜曲集（全78頁、54曲収載）が現存している。
  - 7 ドゥワルカナトの次男で、工房2代目のショロット・チョンドロ・ゴーシュSarat Chandra Ghosh（1886-1944）もまた、明治末期の1907年前後に来日して日本のリードオルガン産業を視察し、帰国直後からインド最初の国産リードオルガン製作を始めた。
  - 8 現ビッショバロティ大学Visva-Bharati University（タゴール国際大学）
  - 9 [Ghosh 1987: 8-9]
  - 10 長崎暢子「南アジアのナショナリズムの再評価をめぐって—ガンディーのswaraj—」、『アジア研究』第48巻1号、2002年、3～24頁。
  - 11 インド・テレグラフ紙 ‘The Telegraph’, 1989年3月19日付記事。
  - 12 20世紀初頭の英国で活躍した作曲家で1935年に家族でインドに移住し、1937年からAIRの西洋音楽部門のディレクター職に従事した。‘Indo-European Orchestra’を設立して西洋と東洋が融合した交響曲の作曲を構想していたが、1939年コレラを患ってコルカタで急死した。（英国ガーディアン紙 ‘The Gardian’, 2006年4月28日付記事）
  - 13 Baruah, U.L. *This is All India Radio: a handbook of radio broadcasting in India*. New Delhi: All India Radio, 1983, pp.4-8.
  - 14 [Ghosh 1987: 9]
  - 15 Sambamoorthy, P. ‘AIR’s Seminar on the Harmonium’, *Sangeet Natak Akademi Journal*, Vol. 20, 1971, pp.5-29.
  - 16 Bakhle, Janaki. *Two men and music: Nationalism in the making of an Indian Classical Tradition*. Oxford: Oxford University Press, 2005, p.88.